

オホーツク文化の終焉と擦文文化

山 浦 清

I. はじめに

オホーツク文化は日本列島先史文化の内にあって、その特異な文化内容により多くの研究者の注目を浴びてきた。本論は近年増加しつつある資料を基礎として、その終末期についてのある見通しを提示するとともに、オホーツク文化の北海道先史文化における意味を考えようとするものである。

オホーツク文化終末期についての最も具体的な像を示されたのは河野広道氏（1955, 6～9）をもって嚆矢としよう。それは次のようにまとめられる。①オホーツク文化と擦文文化の両集落はモザイク状に隣接して存在した。②こうした両者の共存が可能であった背景として、オホーツク文化人の生活圏としての海と擦文文化人の生活圏としての山・河川という差があったからである。③『元』の樺太進入によって大陸北方における諸民族間の勢力関係に変化が生じ、オホーツク文化人の大陸基地が覆滅し、金属器の入手が困難となった。④この期に擦文文化人の進攻があり、オホーツク文化人の多くは滅亡、一部は吸収されたわけであり、それは鎌倉時代にあたるという。

以上の点について後にそれぞれ触れるところであるが、今日においては、そもそも何をもってオホーツク文化の終末とするかという問題、即ちオホーツク式土器最末期の土器として何を考えるかという基本的問題から入らざるをえないように思われる。さらに道北と道東におけるオホーツク文化の地域差という認識も得られるようになってきている（大井, 1973; 天野, 1979）。従ってその終末期についても、またそれに考えざるをえないと言えよう。擦文文化の動向に注目する必要があることは言うまでもない。

II. 道東部における終末期のオホーツク式土器

オホーツク式土器の編年として、今日、最も引用されるのは藤本強氏の編年である（藤本, 1965）。氏はオホーツク式土器をa～e群と五群に細分され、そのe群をもってオホーツク式土器の終末とされたのであった¹⁾。そしてe群の次に来る土器として氏がd群とした竪穴を切っているトビニタイ遺跡2号竪穴出土土器を考えられたのである。しかしこれらの土器については「その住居の形・葬制には大きな差異が認められる。土器の形・生活様式にも大きな変化がある以上、これをオホー

ツク土器と呼んでいいか問題があろう」（藤本，1965，35）とされたのであった。氏のこうした考え方方はその後も保持され、「トビニタイ文化」という名称を掲げることになるわけである（藤本，1979）。このような「トビニタイ式土器」とされるものをオホーツク式土器から切り離して考えることが可能であるか否かについては、トビニタイ遺跡2号竪穴出土土器及びそれに類似するものを今一度考えてみる必要があろう²⁾。

これらの土器の細分を試みたのは菊池徹夫氏（1972）である。氏は次のように三つに細分され、その特徴を記されている。

I (図1)

- 器 形——口縁部は肥厚せずに広く外反して開く。
- 口縁部文様帶——2～3条の擬縄貼付文ないし小形波状貼付文をめぐらせる。2条の場合、その間に鋸歯文・斜格子文・斜線交差文などを描くことがある。
- 胴部文様帶——数条の平行沈線による鋸歯文や斜格子文などを描き、ときに縦・斜の擬縄貼付文を組み合わせる。

II (図2—1～3)

- 器 形——口縁部は若干肥厚するが、器形全体として胴上部（肩部）のふくらみがな

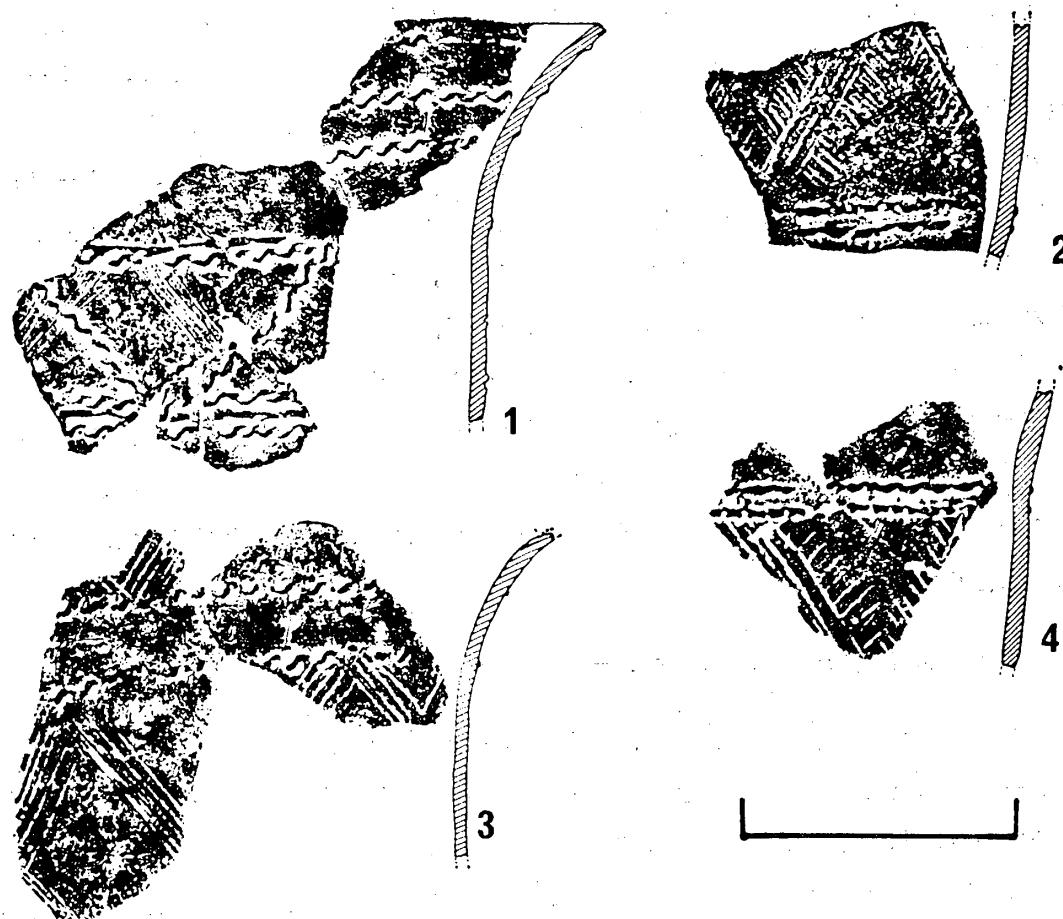


図1 トビニタイIの土器 (Scale 10cm)：駒井編（1964）より

オホーツク文化の終焉と擦文文化

く直線的である。

◦ 口縁部文様帶——1～2条の擬縄貼付文をめぐらすこともあるが、横方向の直線と波線とを一単位とし、波頭と直線とを密着して貼付した文様がおおい。

◦ 胴部文様帶——同上の文様を基本とし、横走する波線や直線の紐状貼付文がひとつの巾広い文様帶として、あるいは間に無文帯をはさんだ複数の文様帶としてめぐらされている。貼瘤文がしばしばみうけられる。擬縄貼付文は、そうした文様帶の上下を画するのに1～2条めぐらされる程度である。

こうした文様上の特徴を、要するに、断面方形の紐状貼付文による直線と波線の装飾ということが出来よう。

III (図2—4)⁸⁾

これらの土器はトビニタイ土器群Ⅰに特徴的な文様要素のひとつ擬縄貼付文と、同じくⅡの紐状

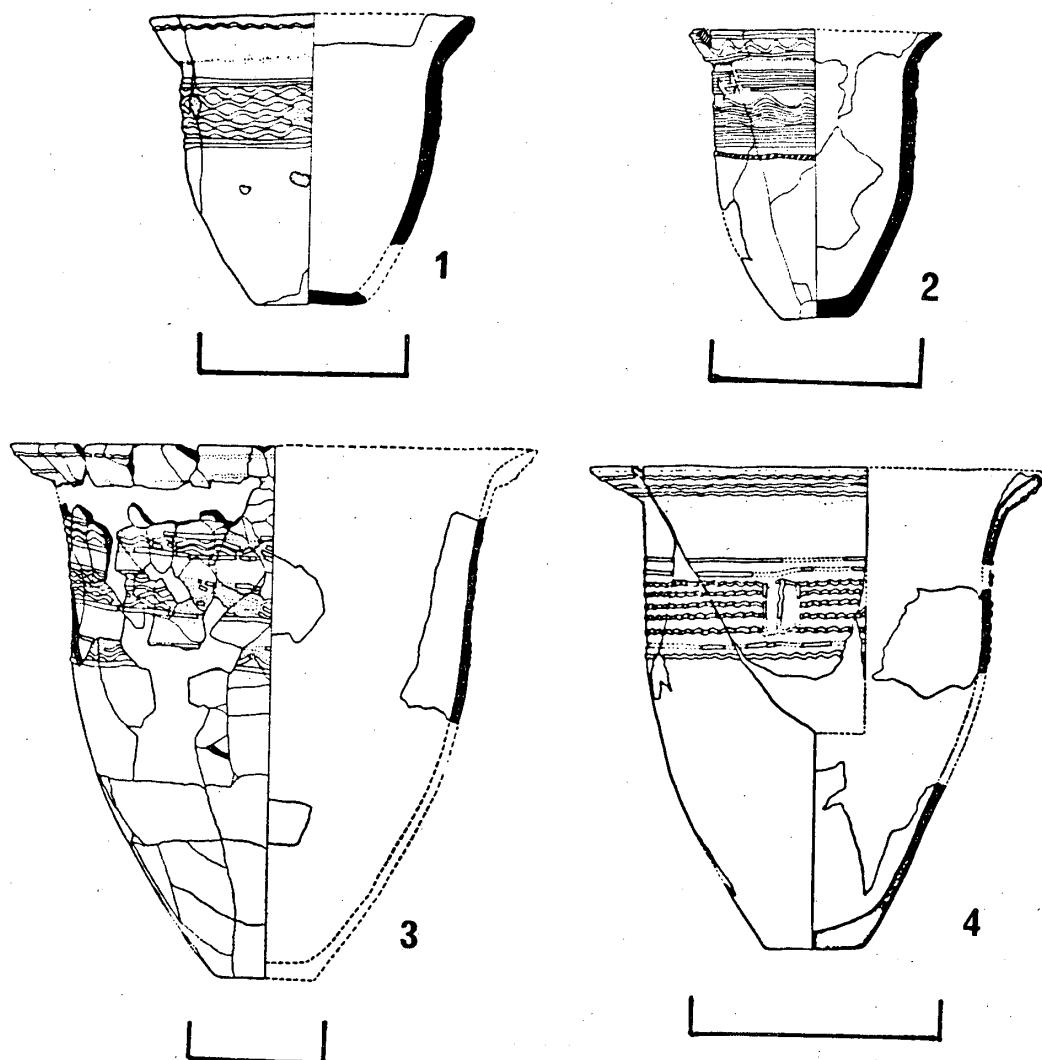


図2 トビニタイⅡ・Ⅲの土器 (Scale 10cm)：駒井編 (1964), 米村 (1970) より

貼付文とが共に用いられてひとつの器面を飾っているものであり、文様帶の一部に縦長の無文部を作り出す例がおおい。

以上、ほぼ原文に近い形で引用してきたが、これらの細分についての批判がないわけではない（大井、1972b, 24）。ここでは、これらの土器の出土状態を考えてみることにしよう。表1は、上記のトビニタイⅠ, Ⅱ, Ⅲがほぼ完形あるいは全体の特徴が認識しえる形で堅穴住居跡の床面より出土した例を集成したものである⁴⁾。資料的にカリカリウス遺跡・須藤遺跡という片寄りがあるのは問題であろうが、トビニタイⅠ, Ⅱ, Ⅲと細分される土器がそれぞれ独立した形で存在することが読み取れよう。ウトロ滝ノ上2号址の例のみが共存とも考えられるが、そのⅠとされる土器は口縁部が肥厚しており、施されている刻文も単純な「へ」の字文を縦に重ねたものであり、上述のトビニタイⅠの特徴を充足しているとは言えないものである。カリカリウス4号址の場合もその口縁部は欠けており、或いは擦文式土器かと思われるものである。今までトビニタイⅠ, Ⅱ, Ⅲのそれぞれが共存、あるいは混在・混出していたと言う例は表1のトビニタイ2号堅穴を始めとしていくつか報告されているようである。しかしながら、完形・半完形品の堅穴住居床面より出土する状況を見たとき、別のものとしてそれぞれの性格を考えるべきであろう⁵⁾。

さらに、トビニタイⅡとⅠ・Ⅲとの出土状況の間に大きな差があることにも気づかれよう。トビニタイ2号、オクフク岩3号、カリカリウス2・3・4・8・9号その他におけるトビニタイⅡのあり方は、これらの土器がそれら堅穴居住者の土製容器コンプレックスといったものを十分に充していることを示しているように思われる⁶⁾。一方、トビニタイⅠ・Ⅲとされる土器を見ると、須藤遺跡・伊茶仁B遺跡に知られるように擦文式土器と共に存している例が圧倒的である。それらの堅穴居住者の生活において、トビニタイⅠ・Ⅲとされた土器のみでは十分な土製容器コンプレックスといったものを充足しえなかつた、換言するならば、トビニタイⅠ・Ⅲは彼等の必要とした土製容器の一要素にすぎなくなっていたと言えよう。トビニタイⅡとされる土器は一つの「型式」と考えることは可能であるが、トビニタイⅠ・Ⅲとされるものは「型式」として認定することは出来ないと言えるのである。

ところで、トビニタイⅡ式土器がオホーツク式土器藤本編年e群に直接的に後続すること、それに並行することはないことは、金盛典夫氏（1976, 42～44）の説く通りであろう。即ちトビニタイ遺跡における1号址と2号址の層位関係、オホーツク式土器藤本編年d群・e群間の狭小な型式差、さらにはトビニタイⅡ式とオホーツク式土器との共伴例のないこと等がその論拠としてあげられるであろう。また後述する擦文式土器との関係においても納得されるであろう。さらにトビニタイⅡ式に比してトビニタイⅠ・Ⅲとされる土器が後出のものであることも、ピラガ丘Ⅱ・Ⅲ遺跡における火山灰（km—5a）を鍵層として金盛典夫氏（1976）の指適する通りであろう。

さて、トビニタイⅡ式土器、トビニタイⅠ・Ⅲとされる土器は古くからオホーツク式土器と擦文式土器との「接触・融合」を示すものと理解されてきたわけであるが（児玉他, 1956; 石附, 1969）、上記のオホーツク式土器e群→トビニタイⅡ式→トビニタイⅠ・Ⅲという変遷はオホーツク式土器

オホーツク文化の終焉と擦文文化

表1 トビニタイ式土器の堅穴住居床面よりの出土状況

遺跡名・堅穴番号	トビニタイ式土器点数			共存擦文土器点数		文 献	
	I	II	III	高杯	深鉢	文 献	使 用 図 版
羅臼町 トビニタイ・2		13				駒井編(1964)	Fig. 102, Fig. 103-1, 2, 4, 5, 7
同上 ルサ・2			1			同上	Fig. 112-1
斜里町 ウトロ滝ノ上・2	1(?)	1				同上	Fig. 96-3, 4
羅臼町 オクフク岩・3		2				宇田川他(1971b)	Fig. 4-2, 3
同上 • 4		7				同上	Fig. 7, Fig. 8-1
同上 船見町高台		4				豊原他(1980)	Fig. 7
標津町 サシリイ北岸・1		2				宇田川(1975)	Fig. 29-1, 2
同上 伊茶仁ふ化場I・1		2				楫田(1980)	Fig. 7-1, 2
同上 伊茶仁B・3	1			2	3	石附他(1973)	Fig. 10-1~3
同上 • 9			3	3		同上	Fig. 27, Fig. 29
同上 カリカリウス・2		2				楫田(1982)	Fig. 15-1, 2
同上 • 3		1				同上	Fig. 23-2
同上 • 4	1(?)	2				同上	Fig. 30-1~3
同上 • 8		1				同上	Fig. 59-1
同上 • 9		1				同上	Fig. 68-1
斜里町 ピラガ丘Ⅲ・3		2			1	金盛(1976)	Fig. 10-1~3
同上 須藤・8			1	1	2	金盛(1981)	Fig. 25
同上・13			1	2	1	同上	Fig. 44
同上・15	1			2	3	同上	Fig. 48-1~6
同上・16			2	1	1	同上	Fig. 53
同上・23	1				1	同上	Fig. 78-1, 2
同上・25				1	2	同上	Fig. 25
同上・26				1	2	同上	Fig. 85
同上・27				1	2	同上	Fig. 90-1~6
同上・29				1	2	同上	Fig. 96
女満別町元町		1				大場他(1960)	Fig. 44-3, 4
弟子屈町下鎧別B・1		1				宇田川他(1971a)	Fig. 11-1

の擦文化が強まる過程とも理解されるわけである。それではトビニタイⅡ式、トビニタイⅠ・Ⅲというのはどのような擦文式土器と関係するのであろうか。図3にしめしたものはトビニタイⅡ式土器と共に伴関係にあった擦文式土器である。図3-1は女満別元町の一堅穴から、同図2はピラガ丘Ⅲ号堅穴から出土した擦文式土器である。前者について宇田川洋氏(1971a, 14)はその共伴関係に疑問を呈されているが、後述するようにその共伴について、しいて異議をさしはさむ必要はないと考える。後者については、報告書によると(金盛, 1976, 12~13), 共伴したトビニタイⅡ式土器は「これよりもわずかに遅れて埋設されたもののように考えられる」としている。これらの擦文式土器の位置付けとしては、元町の土器については佐藤達夫氏(1972, 471)は氏の擦文編年中Ⅲ6としている⁷⁾。後者は口唇上に沈線をめぐらし、口縁部には7本ほどの斜行沈線を単位としてそれぞれ右下り、左下りに施し、胴部文様としては雑な横走沈線の上に2本単位の沈線で格子目文を作

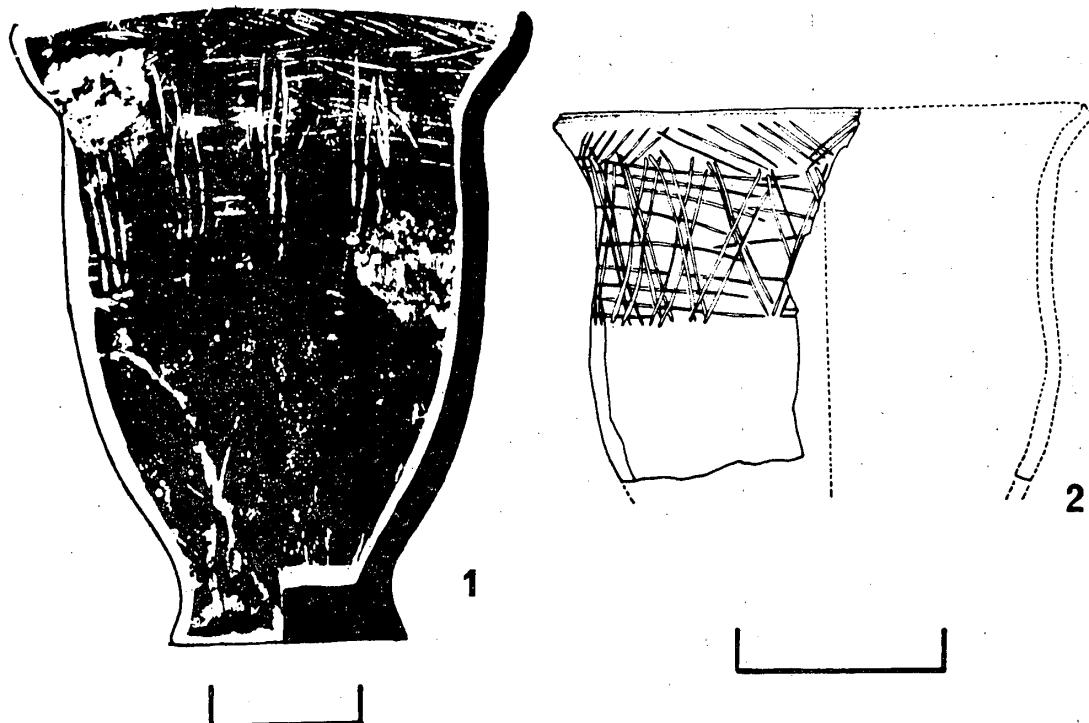


図3 トビニタイⅡに伴出した擦文式土器 (Scale 5 cm)

大場他 (1960), 金盛 (1976) より

り出している。佐藤編年Ⅱ3～Ⅲ1とも言えるものであろう⁸⁾。

次にトビニタイⅠ・Ⅲとされた土器とともに出土している擦文式土器を見てみよう。主に須藤遺跡の資料である。図4—1, 2が須藤遺跡におけるトビニタイⅢであり、同図3, 4がそれらに伴った擦文式土器である。これらの胴部文様帶は複段化したものから、それがやや単純化したものまであり、佐藤編年Ⅳ3～Ⅳ6という位置を与えることが出来よう。図5—1, 2は同遺跡出土のトビニタイⅠとしたものである。同図1は口縁部の形態、胴部文様において前記のウトロ滝ノ上2号竪穴出土のものに近いとも言えるが、共存していたのは無文の深鉢である。同図2は胴部文様帶に擬縄貼付文が施されていない点やや特異であるが、これに伴なう擦文式土器(同図3, 4)は、胴部文様帶がやや単純化しており佐藤編年Ⅳ6前後と言えよう。ところで、須藤遺跡の報文中において、金盛氏は次のように記されている(1982, 127)。即ち当遺跡においては「菊池氏のⅠに相当すべき土器群はほとんどないようである。Ⅰとすべき土器群がⅡ群もしくは「中間的な土器群」と比較できる内容をもっているとすればこれらの土器に後続するものでなければならないように思う」。確かに菊池氏の提示されたトビニタイⅠの土器においては(図1参照)、その刻線のモチーフは数条からなる斜線の両側にほぼ直角になるように短刻線、刻点を施すものが多く見られるのである。こうしたモチーフの差から当遺跡の土器にトビニタイⅠとされる土器群はないと判断されたのである。さらに、こうしたモチーフは佐藤編年においてはⅣ6～Ⅳ10の段階に知られるものである。従って金盛氏の考え方には首肯しえる点もあるが、トビニタイⅠ或いはⅢとされる土器の内容について

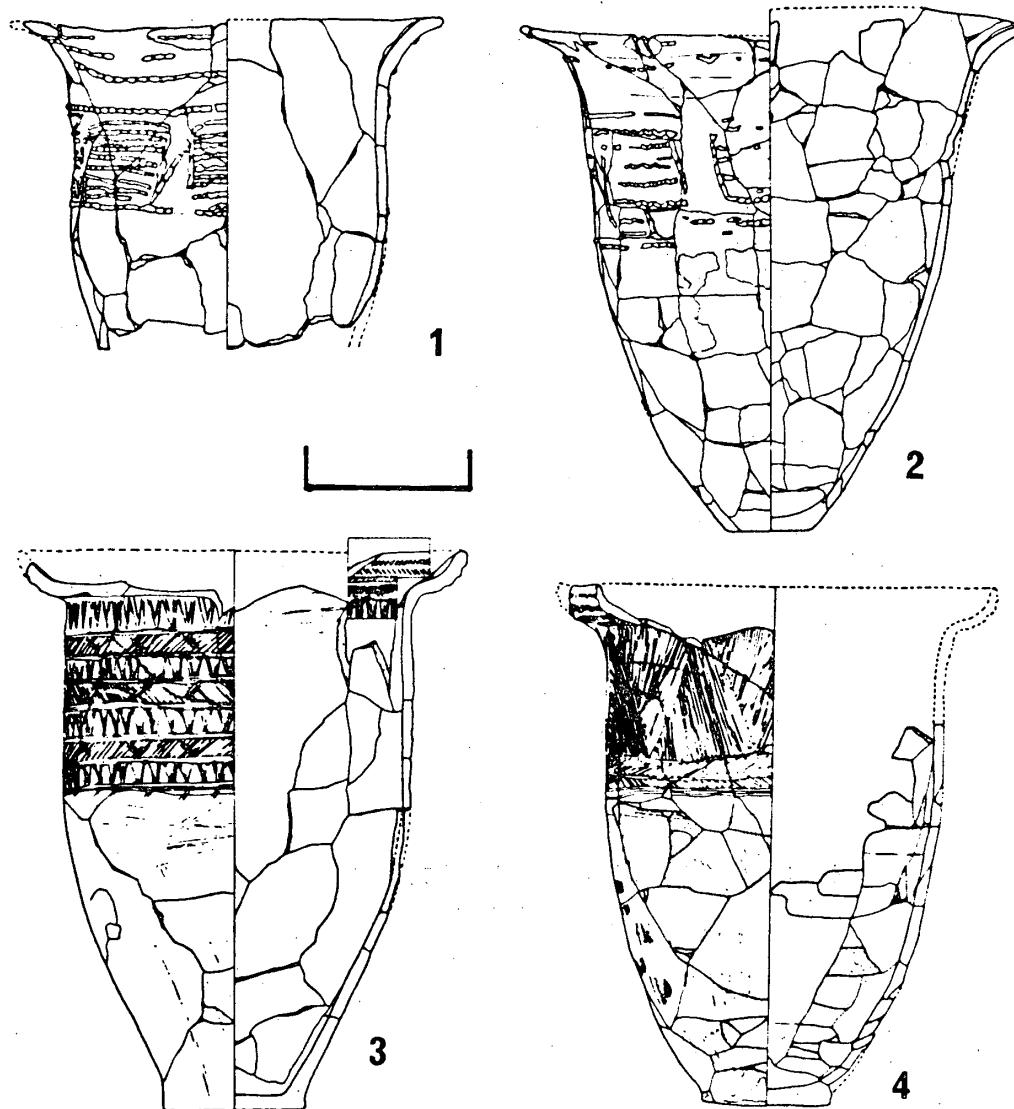


図4 トビニタイⅢとそれに共存した擦文式土器 (Scale 10cm)
金盛 (1981) より

てミクロな議論をすることはあまり意味のあることではないであろう。菊池氏の示されたトビニタイⅠとされる土器は当遺跡において筆者がトビニタイⅠとしたものよりも金盛氏の説くように後出のものと考えられるわけであるが、それはまた別の次元の問題と考えるべきである⁹⁾。

以上述べてきたところをまとめると次のようなになる。筆者はトビニタイⅡとされる土器群を一型式と考えようとするわけである。その器形等の上で擦文式土器の影響が認められるにしても、衆人の指摘されるように、オホーツク式土器の伝統上に位置するわけであり、これを藤本編年e群に後続しオホーツク式土器終末の一型式として設定しようとするものである。藤本氏がこれらの土器群をオホーツク式土器としないとされたのは既述の通りである。しかしながら、一つの文化に

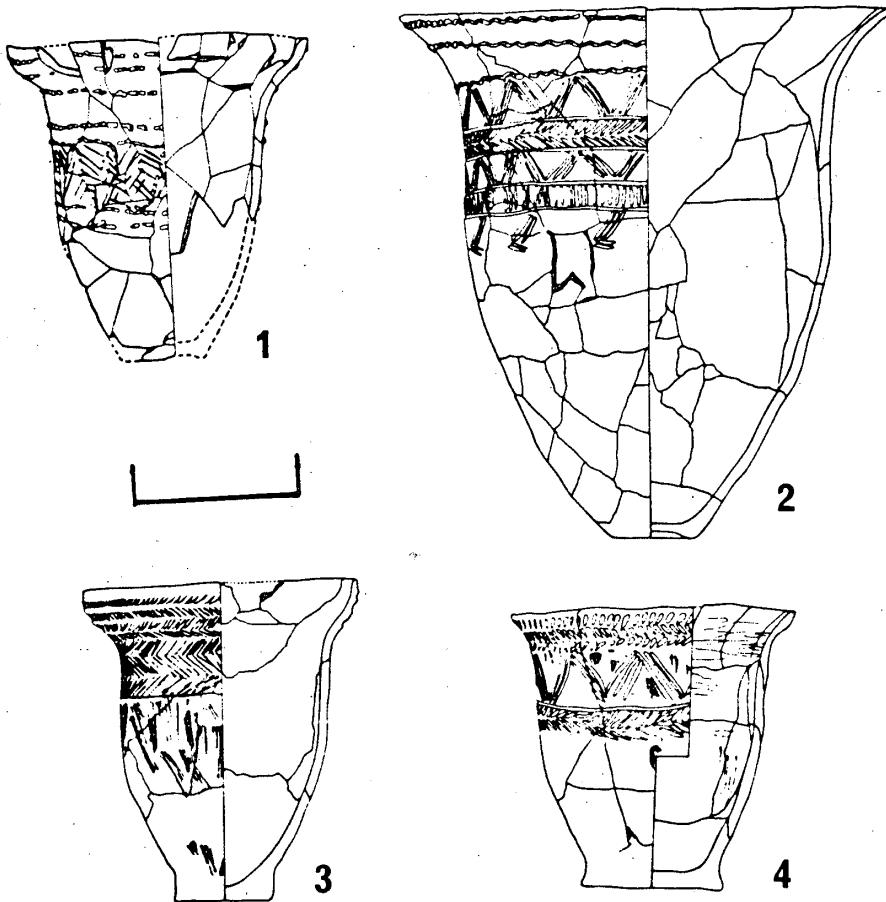


図5 トビニタイ I とそれに共存した擦文式土器 (Scale 10cm)
金盛 (1981) より

は成立と崩壊或いは変質が当然考えられるわけであり、その崩壊・変質過程を切り捨てて、「一定のシステム」(藤本, 1979, 32) が作動している時期のみをもって一文化を把えようとする点には問題があると考えるわけである。

トビニタイ I・IIIとした土器はそれのみでは成立せず、言わば擦文文化の土製容器コンプレックスの一要素にすぎず、擦文式土器自体と理解すべきであると考えるのである¹⁰⁾。そしてトビニタイ II式土器は擦文式土器佐藤編年Ⅲ期にほぼ並行し、トビニタイ I・IIIとされる土器はⅣ期前半を中心とした擦文式土器の一要素と考えるわけである¹¹⁾。特に I については前述のようにⅣ期前半のみならず、その後半まで残るかもしれない¹²⁾。しかしながら、これを基礎としてかつてのようにオホーツク式・擦文式両土器のうち、どちらが最後まで残ったかというような議論をすることはナンセンスと考えるものである¹³⁾。

III. 道東部におけるオホーツク文化終末期の様相について

IIにおいて述べた編年観を基礎として、ここでは他の要素も考慮しつつその終末期について考えていくこととする。そのためには「一定のシステム」の確定していた段階・貼付浮文期(藤本オホ

オホーツク文化の終焉と擦文文化

ーツク編年d・e群)について考えてみる必要もあるし、さらにオホーツク文化にその影を次第に強くする擦文文化について目を向ければなければならないであろう。

古く大井晴男氏(1970; 1972a)は擦文式土器東大編年II(佐藤編年III)以前における道東・道北におけるその遺跡の少ない点を指

表2 道東部における擦文文化の堅穴住居(佐藤編年III以前)

遺跡名・堅穴番号	時期(佐藤編年)	文献
常呂町 岐阜第2・1B 同上 • 11下層 同上 • 5 同上 • 8 同上 • W3 同上 • 3 同上 • 7	II 3 III 6 III 7 同上 同上 同上 同上	東京大学(1972) 同上 同上 同上 藤本他(1977) 同上 同上
	II	宇田川他(1971a)
	III 5	米村(1970)
	III 1	金盛(1976)
	III 5	同上
	III 6	同上
	II?	佐原他(1978)
弟子屈町下鎧別B・3		
斜里町 ピラガ丘I・5 同上 III・5 同上 • 6 同上 • 9	III 5 III 1 III 5 III 6	米村(1970) 金盛(1976) 同上 同上
標津町 伊茶仁チシネ2・1	II?	佐原他(1978)

摘し、東大編年IIからIII(佐藤編年IV)にかけての道央部からの移住を考えられたことがある。氏の論考以前・以後における道東部の佐藤編年III以前の住居址として表2のようなものがあろう。これらの内にはピラガ丘I・5号堅穴のように報告書からはその伴出関係の明瞭でないものもあり、大井氏(1972a, 442)の指摘するように、道東において知られる佐藤編年IV期以後の住居軒数との差は大きく、その差は今後の調査によっても埋まらないであろう。しかしながら、大井氏(1972, 442~444)も認められるように佐藤編年III期以前においても、IV期以後に比較すれば少数ではあるが、道東部において擦文文化人の生活が営まれていたことは否定出来ない事実であろう。

ところでオホーツク文化期の遺跡からは本州産の遺物が出土しており、その代表的な例としてはモヨロ貝塚で知られる蕨手刀が挙げられよう(大場, 1962)。さらにこれらに伴って日常的に使用される刀子類ももたらされたであろうし¹⁴⁾、トコロチャシ1号内側堅穴出土の土師器(駒井編, 1964, Fig. 14—5)もそうしたものと考えられるわけである¹⁵⁾。そして、これらの本州産のものは当然道央・道東の擦文文化人を仲立としたのであろうし、その交流は貼付浮文期あるいは刻文期(藤本編年b群)から考えられるわけである。図6—1はピラガ丘III遺跡出土の土器である。その器形・口縁部文様からするとオホーツク文化刻文期の土器とも言えるものであるが¹⁶⁾、その胴部文様は横走沈線上に格子目文が描かれており佐藤編年II期末からIII期にかけてのモチーフを有する。ある意味で「接触・融合型式」などとも言えるものである。図6—2は二ツ岩遺跡(野村他, 1982)2号堅穴骨塚中出土の擦文式土器である。同堅穴は貼付浮文期の住居址であり、その骨塚より出土した点でこの土器は注目されよう¹⁷⁾。報告者は東大編年IIとされている。しかし、角ばった口唇、胴部から口縁にかけてのカーブ、さらに三角列点文といった点はやや特異ではあるが佐藤編年II期に入れることも可能であろう。こうした例よりすると、オホーツク・擦文両文化は貼付浮文期、あるいは刻文期においても、それぞれ文化的に独立しながらも、一定の交流があったことは認められようし、それは物々交換といった形での交易を予想してよいのであろう¹⁸⁾。そして、こうした共存関

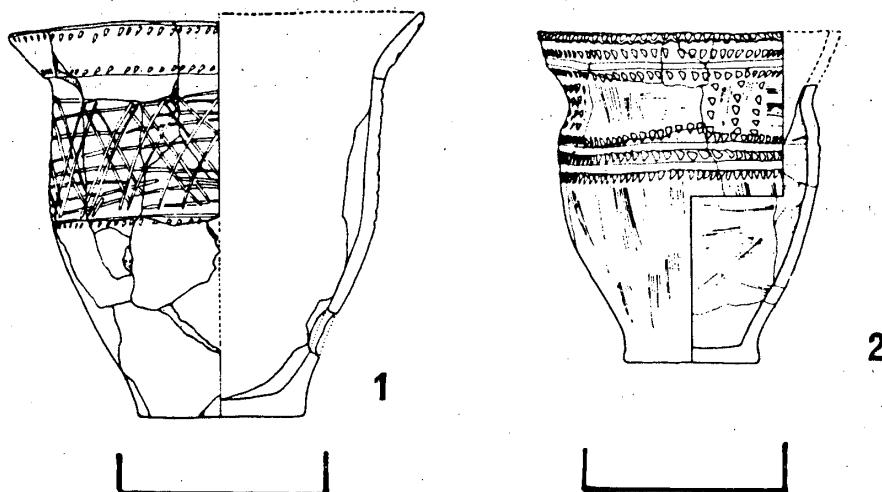


図6 オホーツク式土器と擦文式土器 (Scale 10cm)

金盛 (1976), 野村他 (1982) より

係が考えられる背景としては、前述の河野氏が説かれたような両者の生業形態の差（テリトリーの差）が考えられるのである。

ところで、トビニタイⅡ期に入ると擦文文化との関係は異なったあり方を示すようになる。この時期の土器、さらには住居址が十勝太若月（吉野、1974）、女満別元町、弟子屈町下鑓別等に知られるように内陸へ、さらには道東太平洋岸へと広がるのである。さらに、この点は貼付浮文期に一部では生じていた現象とも考えられるが、二ツ岩（海拔44m）・ウトロ滝ノ上（海拔60m以上）・オクフク岩（海拔40m）等に知られるように急峻な崖上に立地する遺跡が出現するのである¹⁹⁾。こうした背景として、その要因については後述するとしても、擦文文化人の海岸部への進出、オホーツク文化人のテリトリーの圧迫、オホーツク・擦文両文化の間の緊張関係の発生という状況を想定することが可能であろう。そして、こうした状況下においては、かつて河野氏の説かれたように擦文・オホーツク両文化のそれぞれの集落・テリトリーは混在していたと考えられよう。一方、藤本氏（1979）の言い方からするならば、オホーツク文化人が「新たな生業システム」を模索していたとも言えよう。しかしながら、この段階を最後として、以後オホーツク文化は擦文文化の中へくみ込まれ、その同化現象を完了することとなる。そしてこれ以後、擦文文化が道東部において多数の遺跡を残すわけであり、それは擦文式土器佐藤編年Ⅳ期である。

ところで、そのⅣ期以後の擦文文化の集落は道東部においても多数調査されている²⁰⁾。これらに対してトビニタイⅠ・Ⅲとされるような土器をふくみながら擦文式土器Ⅳ期と考えられる須藤遺跡、或いは伊茶仁B地点といった集落が存在することはどのように説明されるであろうか。須藤遺跡では30基の住居址が調査されているが、これらの内カマドを持つものは3基にすぎず、伊茶仁B地点では10基の竪穴住居が調査されているが一基たりともカマドを持たないのである。一般に知られる擦文文化の集落址とのこうした差は何を意味するのであろう。伊茶仁B地点を調査された石附喜三男氏（1973, 58）は次のように書かれている。「この伊茶仁B遺跡の場合、オホーツク文化的要

オホーツク文化の終焉と擦文文化

素が多々認められるにせよ、伊茶仁川をさか上ったこの内陸部に集落が営なされたのは擦文文化的な経済的基盤にその生活が依存していたからだと考えるのである」。「絶対的にみると、本遺跡の文化は、融合形式とは言っても擦文式文化の重みが強いように感じられて仕方ないのである」。

このような状況を見たとき、道東部擦文Ⅳ期においてある意味ではステロタイプ化されて理解されてきた擦文文化の集落とやや「異質」の擦文文化集落とが、異なるテリトリーを持つにしろ共存していたと考えざるをえないわけである。そして、ある意味では、こうした「異質」の集落が大堅穴群の出現した道東における擦文文化Ⅳ期の重要な一翼を担なっていたと考えるのである²¹⁾。

IV. 道北部におけるオホーツク文化終末期の様相について

オホーツク文化における道北・道東のそれについて地域性の問題が登場したのは1970年代に入ってからである。香深井遺跡・元地遺跡等の調査を基礎として道東部における貼付浮文期に並行して、道北部においては沈線文系土器（沈線文、沈線と刻文の複合文、摩擦式浮文）が主体となる時期（以後、沈線文期と呼ぶ）が指摘されるようになってきたのである（大井、1972b；天野、1979）。そして、この時期においてその土器に示されるように、その他の面においても道北と道東との間に大きな地域差が生じたと理解されたわけである²²⁾（天野、1979；山浦、1982）。こうした沈線文期の後に、道北においてもオホーツク式・擦文式の「接触様式」として一群の土器群が指摘されている（大場、1968；大井、1972）。粗製の厚手平底土器であり、沈線文、摩擦式浮文、型押文等の文様を持つものである（図7参照）。こうした土器は礼文島上泊（大場、1968）・香深井（大場他、1967）・元地（大井、1972b）等の遺跡、稚内の声問大沼遺跡（大場他、1972），浜頓別豊牛（大場、1968）等で出土しているようである。しかしながらこれらの内、遺構に伴って出土した例としては大沼遺跡のみであり、これらの土器の性格について考えることはトビニタイ式土器に比してかなり難しい問題である。しかしながら大沼遺跡1号堅穴においてはカマドを有する住居址より擦文式土器片とともに6点の完形・半完形のこうした土器が出土しており、さらに元地遺跡においては（大井、1972），こうした土器を主体とする層（黒土層）が存在したという点から推測するならば、これらの土器を一型式として認めるべきかと思われる所以である。そこで、これらの土器を「上泊式」と呼ぶこととして²³⁾、図7がその主要な土器である。同図1、2はその沈線文において擦文式土器系統さらに佐藤編年で言うならば擦文Ⅲ期の文様を有するものである。一方、同図3の熊の足の型押文、同図4の櫛目文はオホーツク式土器系統の文様である。その胎土・焼成等もふくめて考えてみるとオホーツク式土器の系統と考えてよいのであろう。そして樺太におけるオホーツク式土器伊東編年の南貝塚式と、型押文を多用する点、全体の器形、張り出した底部という点等で強い関連を持つのであろう²⁴⁾。

ところで、元地遺跡における所見として大井氏（1972）は上泊式土器を主体とする黒土層出土の擦文式土器片を東大編年Ⅱ期後半とされている。それらの土器片（図7—6～8）は横走沈線の上に格子目その他の文様が付されており、佐藤編年Ⅲ期としてよいであろう。また大沼遺跡の例を共

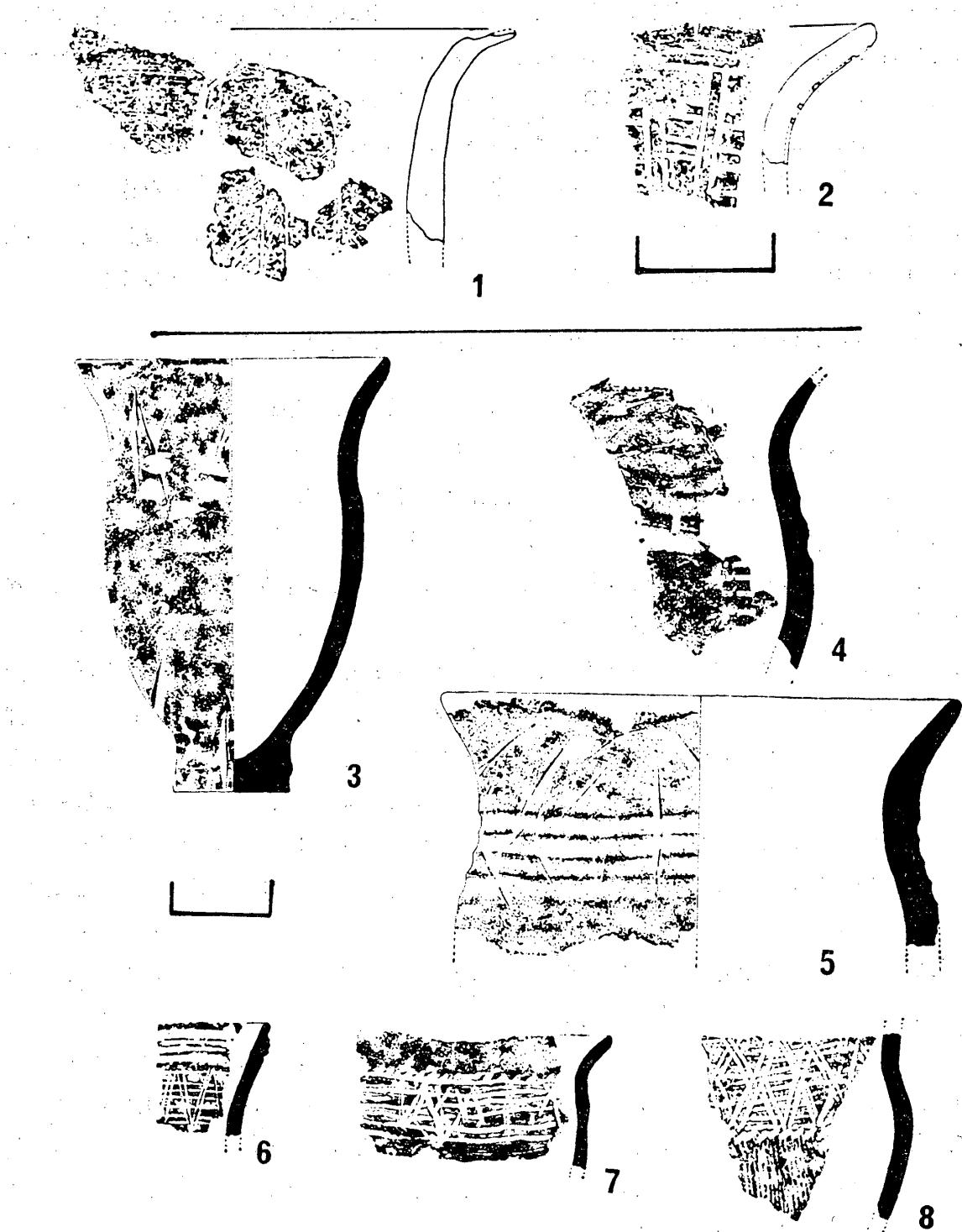


図7 上泊式とそれに共伴した擦文式土器 (Scale 5 cm)
大場他 (1976), 大井 (1972) より

存と考えるならば同Ⅳ期にまで下るかとも思われるのである。一方、道北部においては恵北遺跡(大場他, 1972), 天塩川口遺跡(加藤他, 1978)等に知られるように、オホーツク文化人のテリトリーとも言える地域に佐藤編年Ⅲ期とされる擦文文化人の恒久的な生活が営まれるようになるわ

オホーツク文化の終焉と擦文文化

けである。さらに礼文島香深井遺跡においても佐藤編年Ⅲ期以後の擦文式土器の資料が増加し、そのⅣ期の堅穴住居址が作られるようになるのである²⁵⁾。こうした所見から推測するならば、次のようなことが考えられるであろう。即ち道北での擦文Ⅲ期以後の擦文文化人の諸活動の活発化によりオホーツク文化人のテリトリーが圧迫されるという状況が生じたであろうし、オホーツク文化人にとって擦文文化人は大きな脅威となったであろう²⁶⁾。ある意味での「社会的混乱」が生じ、そうした反映として粗製の上泊式土器が作り出されたと理解することも可能であろう。こうした点から大井氏の説くように(1972, 29), オホーツク文化人一部は樺太へ、或いは道東へと移動したとも考えられる。しかしながら大沼遺跡に知られるように、擦文文化人の間で生活を続けた人々もいたのであろう²⁷⁾。さらに佐藤氏(1972, 480)・大井氏(1972 b, 25)等が指摘されるように、樺太における南貝塚式には擦文式土器の影響が見られるわけであり、南貝塚式そのものと考えられる土器が枝幸川尻チャシ(大井他, 1972, Fig. 18—13), さらには端野広瀬遺跡(加藤他, 1981, Fig. 12)等からも知られるわけであり²⁸⁾、オホーツク文化人・擦文文化人の両者が宗谷海峡を挟んで対峙したと想像することは問題であろう。

ところで大井氏によれば(1972 b, 29), 道北部と道東部においてオホーツク文化と擦文文化の接触には若干の時間的な差があったことが指摘されている。それによれば、道北においては擦文東大編年Ⅱ後半であり、道東においては擦文東大編年Ⅱ末からⅢ初頭のことであるという。筆者の今まで述べた考え方よりするならばトビニタイⅡ式土器・上泊式土器の両者に並行する擦文式土器がその編年細分のどの段階にあたるかということとなろう。今日の段階においては、それは元地遺跡において上泊式土器と共に存した擦文式土器片(図7—6~8)と、ピラガ丘Ⅲ3号(図3—1), 女満別元町堅穴出土の擦文式土器(図3—2)とをどのように考えるかという点にかかっているようと思われる²⁹⁾。しかしながら、ピラガ丘Ⅲ3号堅穴出土の擦文式土器については若干問題はあるにせよ、元町例と元地例について、その前後関係を論ずることは大きな意味を持たないよう思われる。ともに佐藤編年Ⅲ4~Ⅲ6というところであろう³⁰⁾。

V. オホーツク文化の終末と擦文文化

大井氏(1970)はオホーツク文化終末期についての一つの仮説を提示されている。それを図式的にまとめるならば次のようになろう。

- ①鎌倉幕府による奥州藤原氏征討(1189)。
- ②道南・道央への本州勢力の進出; 当地域での擦文文化の終末と道北・道東への擦文文化人の移動。
- ③オホーツク文化の終末と道北・道東での擦文文化人の増加³¹⁾。

こうした仮説は非常に興味深いものであるが、今日、果してこうした仮説を説くことが可能であるか否か、今一度ここで考えて見よう。道南部は別として³²⁾、その第一は道央部と道北・道東部における時期的な擦文文化堅穴住居址の偏在の問題である。大井氏は石附氏(1968)等の論考を基礎として、擦文東大編年Ⅰ・Ⅱ期には道央を中心として堅穴が多く、Ⅲ・Ⅳ期になると道北・道東に

1000基を越える堅穴群が出現することを指摘され、そこに人間の移動を考えられたわけである。しかしながら道央部においても近年石狩川中流域を中心として700基を越える堅穴群が存在したことが明らかになってきている（羽賀、1975）。さらに擦文期の集落址も多数発掘調査されるようになってきている。管見に入った遺跡としても千歳市末広遺跡の88基（大谷他、1979）、札幌市K446遺跡の11基（上野他、1979）、同K460遺跡の17基（上野他、1980）等がある。ただ、これらの報告書を概観すると大井氏の説くごとく、それらの堅穴住居址は佐藤編年Ⅲ期までとしてよいであろう。そしてⅣ期とされる堅穴としては今日までのところ、大沼忠春氏（1979, 63）の指摘された MacCord 氏（1960）調査の千歳市田中遺跡の例があげられるだけかもしれない³³⁾。従って、こうした道央部と道北・道東部における堅穴住居址増減の背景として大井氏の仮説は今後とも検討されるべきであろう。しかしながら、筆者はまた別の考え方も可能ではなかろうかと考えている次第であり、それについて以下記してみたいと思う。

そもそも擦文化の実年代はどのように考えられるであろうか。その成立時期については8世紀ということで諸家の一致するところのようである（大沼、1979, 55）。一方、その終末期については11世紀とする佐藤説（1972, 485）から大井氏（1970, 67）、前田氏（1976）の説く17世紀まで多様である。またその終末において道央部と道北・道東部に大きな時間差を考えるか否かは別として、道央部に関しても11世紀から13～14世紀（高杉、1982, 124；大沼、1975, 64）と多様である³⁴⁾。こうした状況の中にあって擦文式土器佐藤編年Ⅲ期からⅣ期への転換を何世紀に考えるかはさらに困難な問題かと思われる。しかしながら88基の堅穴住居から擦文式土器或いは土師器を出土した末広遺跡において興味深いデーターが提出されているようである。報告者の大谷氏（1982, 467～468）はその土器群のうち杯について次のように分類し、それを時間的変化と考えられている。

I類（ロクロ未使用）

- (a) 体部に段を有し、内側にみあう段が認められ、下間に籠によるケズリ整形が認められるもの。
- (b) 体部に段、沈線を有するもの。器面調整は外面上半は横ナデ後籠ミガキ、体部から底部にかけて、又全体を籠ミガキしたものが認められる。内面は上半は横方向の籠ミガキ、下半は放射状の籠ミガキの後、黒色処理するのが通例である。

II類（ロクロ使用）

- (a) 底部切り離しが回転糸切りでその後再調整が加えられ、内面は黒色処理が施されているもの。
- (b) 底部切り離しが回転糸切りで無調整のもの³⁵⁾。（これを苦小牧火山灰の上下で1・2に細分される。）

そして大谷氏は「I類は東北地方で製作された遺物を持つ人間集団の移動があったと考えられる……。土師器はI～II類にわたり一貫し、本州方面の土師器と密接な関係にあり、本州側に対応する型式変遷が認められる」と記されている。

末広遺跡については将来さらに詳細な分析が発表されると信ずるが、こうした末広遺跡におけるⅠ、Ⅱ類の分類基準、さらにその細分の分類基準が型式学的に道央部において認められ、それを東北地方との関連で考えることが可能であるとするならば、次のような並行関係を説くことが出来るであろう。即ち末広遺跡Ⅰ類・Ⅱ類はそれぞれ東北北部における桜井第Ⅰ型式、第Ⅱ型式に相当するであろうし（桜井、1958、141～156）、近年、三浦圭介氏（1982）が発表された編年観よりするならば、末広遺跡Ⅱ類はその松元15号址を代表とする第2段階（9世紀後半）から近野78号址を代表とする第3段階（10世紀中葉～10世紀末）に対応しよう。岩手県において三浦氏の第3段階に対応するものとしては相原康二氏（1981、264～276）のⅩ群、あるいは水沢市膳生遺跡（高橋与右エ門、1982、565～566）における第Ⅲ群B・Cといったものであろうし、さらにこれらは宮城県内においては白鳥良一氏（1980）の説く10世紀代とされる表杉ノ入式E群にあたるとされよう。従って、こうした北海道から東北にかけての並行関係が認められるとするならば、末広遺跡Ⅱb類の絶対年代として10世紀を一つの指標として考えることが可能であろう³⁶⁾。

ところで末広Ⅱb類とされた住居址には苦小牧火山灰（Tm）を切っているもの（Ⅱb₂類）と、それをかぶっているもの（Ⅱb₁類）との二種類があることは先に記した通りである。これらの内Ⅱb₂類とされた住居址のうちには擦文式土器としては佐藤編年Ⅲ期とされるものが目につくが（大谷他、1982、Fig. 462）、それとともに佐藤編年Ⅱ期末或いはⅢ期初期と考えられる擦文式土器（図8—5）も出土している。一方Ⅱb₁類とされた土器を出土する全部で15基の堅穴住居からは図8—1～4のような擦文式土器が発見されている。これらの内には佐藤編年で言うならばⅡ期末とされるものがあろう³⁷⁾。このように考えるならば、TmはⅡ期末に降下したものであり、非常に短絡的ではあるが佐藤編年Ⅲ期の土器群を10～11世紀代と位置付け、型式の存続年数等についての問題はあろうが、Ⅳ期を12世紀代とすることとしたい³⁸⁾。

以上、やや乱暴な論旨の展開とは考えられようが、こうした絶対年代の内において佐藤編年Ⅳ期の道央部における堅穴住居址の減少は別の観点から理解することも可能なのではなかろうか。即ち、東北地方以北における居住形態の変化、堅穴住居から平地住居への移行という現象の一環として理解しようと考えるわけである。たとえば近年報告された11～12世紀を中心とされる青森県古館遺跡（北林他、1979、595）において堅穴住居址47基に対して、「非住居建築跡」として平地式建物跡が119棟検出され、「関東・東北地方では平安時代末期まで、北海道では鎌倉時代末期まで、山間丘陵地帯に堅穴住居集落の全盛が続いている」とする考え方にある修正を求められようとしているのである。さらに相原氏のまとめられた岩手県内においてもそのⅧ期平安時代以後堅穴住居址、集落の様相において大きな変化が認められるようである。さらに宮城県内においては一般集落が堅穴住居から掘立柱建物へ転換するのは10世紀に入ってからとされている（宮城県多賀城跡調査研究所、1981、60）。勿論、こうした現象については今後とも土器編年の研究、集落の性格の問題、それぞれの住居の社会的機能の問題等々とともに追求されるべき点はあろうが、こうした堅穴住居から平地式住居への東北地方における変化と軌を一にした形での道央部における居住形態の変化を考えよ

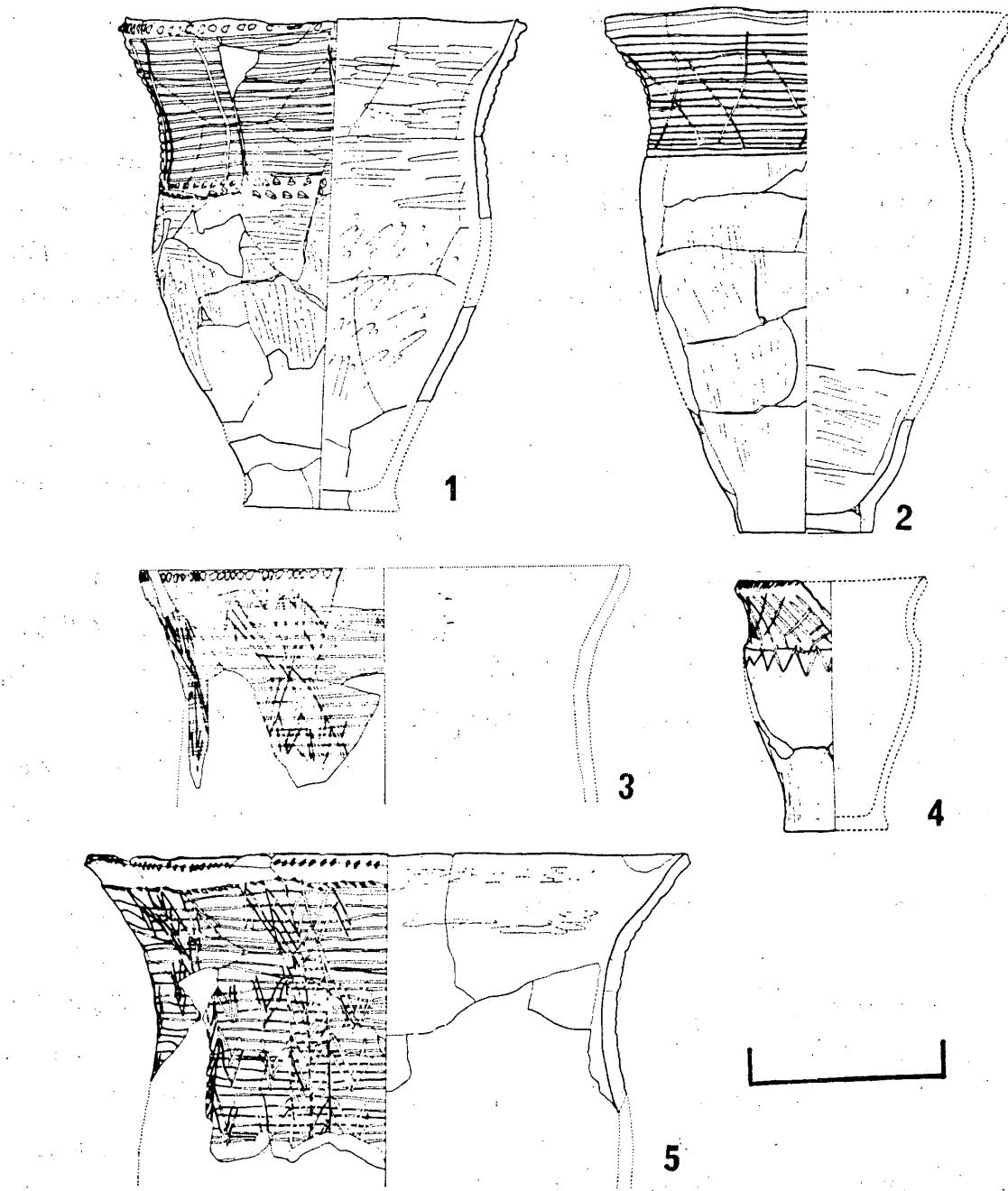


図8 末広遺跡出土の擦文式土器 (Scale 10cm)
大谷他 (1981, 1982) より

うとするわけである。この堅穴住居廃絶の要因については、次に述べることとして、その前に佐藤編年IV期以後の道東・道北部における擦文文化の堅穴住居の増大はどのように考えられるであろうか。藤本氏 (1982a, 169) の説くように、擦文文化における集落構成上の一原理「あきらかに前代に住居のあったくぼみはさける」という点から今日道東・道北に見られるような多数の堅穴住居址が残されたことも一因であろうし、あるいは佐藤編年IV期が他の時期に比して長期におよんだという理解の仕方も出来るかもしれない。さらには大井氏の移動説も一面受け入れられるかもしれない

オホーツク文化の終焉と擦文文化

い。しかし、ここで道央部における堅穴住居廃絶をも同時に説明するより内的な要因が考えられるべきであろう。それは本州との交流の増大、特に鉄器の普及ということである。今日までのところ擦文文化諸時期における鉄器普及の変化についての考察は十分になされているわけではないが³⁹⁾、鉄器の普及は道央部における堅穴住居の廃絶という現象を生みだし⁴⁰⁾、道北・道東部においては擦文文化人の諸活動、生業活動の活発化を促したと推測するわけである。ここにおいて、より多くの鉄器入手のために、交換商品として海獣類の毛皮等の海産物の直接的獲得をめざして、擦文文化人のオホーツク海岸部への進出が開始され、そこにオホーツク文化人との融合が生じたのである。オホーツク文化人の保有した生業技術体系の導入ということが行なわれ、それによって擦文文化人のオホーツク海岸部でのいわば economic niches (Higgs 他, 1975) も拡大したわけである。そしてこうした背景を佐藤編年Ⅳ期の道東・道北部に見ることは今日の資料段階において既に可能であろうし、それによってⅣ期の大堅穴群出現についての説明ともなるのではなかろうかと考える次第である。

VI. おわりに

オホーツク文化の終焉とそれがどのような形で擦文文化の中に吸収されたかという点について、一つの解釈、あるいは一つの見通しといったものを述べてきたつもりである。そして、以上のような考え方立った時、かつて渡辺仁氏(1974)が述べられたように、アイヌ文化成立の上でオホーツク文化の果たした役割についてより積極的に評価すべきであるし、アイヌ文化前段階としての擦文文化の性格とその変遷についても地域・時期ごとにより多様なあり方を考えるべきであろう。さらに今後の問題として、既に藤本氏(1979)はその一步を進められているが、オホーツク文化から擦文文化にかけてのテリトリー変遷の問題を種々の観点、例えば Higgs 氏 (1975) 等のテリトリーについての分類を基準として、小地域において具体的に分析していくことが課題として残されていよう。

最後に本論作製にあたっては次の方々に資料・文献等々で特に御世話をなった。記して感謝したい。(敬称略・順不同) 桜田光明(標津町教育委員会), 金盛典夫(斜里町教育委員会), 天野哲也(北海道大学), 平川善祥(北海道開拓記念館), 宮塚義人(小平町教育委員会), 大谷敏三(千歳市教育委員会), 上野修一(札幌市教育委員会), 久保泰(松前町教育委員会), 三浦圭介・工藤大(青森県教育庁), 相原康二(岩手県教育委員会), 石田守一(我孫子市教育委員会), 清藤一順(千葉県文化財センター)。

1983年3月11日 稿了。

注

- 1) 藤本編年 a 群の位置付けについては大井氏の批判がある(大井, 1973)。筆者も大井氏の説を後述のように受け入れるものである。
- 2) 「トビニタイⅡ土器」、「トビニタイ土器群」という名称は本田氏他(1970), 菊池徹夫氏(1972)等によっても使用されている。

- 3) 菊池氏は「中間的な土器群」として分類されているが、本論では「中間的」であるか否かは別としてⅢとして記すこととする。
- 4) こうした完形土器、あるいは全体の形の判明する土器のみに注目する方法については問題があるかとも思う。しかしながら一住居居住者の一時期における土製容器としての土器の全容を探ろうとする場合には許されるであろう。
- 5) 完形・破片を問わず、「共存」は「共存」として理解すべきであろうという考え方も出来よう。これについてトビニタイ I, II, III のそれぞれの間の系統関係が問題となろうし、さらには「型式学」の問題ともいえよう。近年大井氏(1982)は新に「型式学」について論じられている。筆者(1977)もかって「型式」について拙文を発表したことがある。今日見るとその論調には「冷汗三斗」といったところであり、舌足らずのところもある。しかし、その考え方は基本的にかわっていない。
- 6) ピラガ丘Ⅲ 3号址、女満別元町の堅穴においてトビニタイⅡと共に擦文式土器が発見されている。こうした例は次に述べるトビニタイ I・III のあり方とはその土製容器のコンプレックスといった点において本質的に異なるものと理解したい。
- 7) 擦文式土器の編年については東大編年とされるもの(駒井編, 1964), 石附編年(1968), 菊池編年(1970), 藤本編年(1972)といったものがある。それぞれ擦文式土器の変遷についての理解において大差はないと思われるが、全道的に資料を扱っている点、きめ細かく細分されている点において本論では佐藤氏の編年を使用したい。勿論、氏のトビニタイの土器についての考え方さらには擦文式土器とオホーツク式土器との関係について同意しない点も後述の通り多々ある。上記の種々の編年については宇田川氏(1980, 151~182)がまとめられており、本論における佐藤編年の使用法もそれにのっている点がある。
- 8) その他、カリカリウス 4号堅穴の一土器も前述のように擦文式土器とも考えられるものである(相田, 1982, Fig. 30-2)。胴部文様は一見すると佐藤編年Ⅳ期とされるかもしれないが、胴部文様下の貼付を擦 1982, Fig. 30-2)。胴部文様は一見すると佐藤編年Ⅳ期とされるかもしれないが、胴部文様下の貼付を擦文式土器に間々見られるものと同一のものとすると佐藤編年Ⅲともされよう。しかしながら、口縁部も欠けておりその判断は見送りたい。
- 9) 菊池氏の示すようなトビニタイ I とされる土器が将来純粹な形で発見されるならば話は別である。しかしながらこれらを須藤遺跡において筆者がトビニタイ I とした土器と一連の性格のものと考えるならばその可能性は少いであろう。
- 10) こうした見解は既に佐藤氏(1972)によって述べられている点である。しかしながら、その編年的位置付けにおいては異なる。
- 11) こうした点からすると石附氏がおこなった下田ノ沢遺跡、伊奈仁B地点、浜別海遺跡を基礎としての「トビニタイ式土器」についての編年的論考はその一部において正しいと言えよう(石附, 1973, 53~56)。さらにカリカリウス遺跡を調査された相田氏(1982, 103)の「トビニタイ式土器」についての理解も筆者に近いものと考える。
- 12) こうした点では菊池氏の示したトビニタイ I の刻線文を基礎としての「トビニタイ式土器」についての宇田川氏(1971a, 15)の考え方を否定することは問題があろう。
- 13) 勿論、トビニタイ I・III といった要素の変遷を考えることは若干意味のあることであろう。
- 14) 今日まで金属器の系統については大陸側に目が向けられすぎたのではないか。菊池俊彦氏(1976, 57)も説くように他に毛抜形大刀・山刀形大刀・直刀等は本州からの伝来品であろう。
- 15) 他に亦稚貝塚からは鬼高式並行の土師器が出土しているという(岡田他, 1978, Fig. 6-8)。さらに樺太においてもその共伴関係については問題はあるが土師器と考えられるものが出土しているようである(Shubin, 1979, Fig. 48-5)。
- 16) 大井氏の「型式論」よりすればこの土器を藤本編年 c 群と位置付けることも出来よう。この点について筆者に異議はない。
- 17) 両文化の時間的関係を示すだけでなく、オホーツク文化人にとって「聖なる場所」とも言える骨塚中か

オホーツク文化の終焉と擦文文化

- ら出土したという点は興味深い。オホーツク文化人の擦文文化の物についての一観点を示していると考えるのは想像のしすぎであろうか。なお骨塚については天野氏の論文(1975)を参照されたい。
- 18) その交換物としては一般的に考えられるようにそれぞれ毛皮と金属器といったものであろう。
- 19) 野村氏等(1982, 125)の計算によれば、オホーツク文化の遺跡の標高は十和田期5m・刻文期5.1m・貼付浮文期10.9mと変化するといふ。
- 20) 擦文文化、特に道東・道北の様相については藤本氏の著作(1982a)を参照されたい。
- 21) ここで「やや異質の擦文文化集落」と呼んだ遺跡を筆者は「オホーツク文化」、あるいは「トビニタイ文化」と理解するつもりはまったくない。土器の稿でもふれたが、擦文文化、オホーツク文化に比して文化内容の上での積極的な独自性が認められない以上、そこに一文化を設定することには反対である。筆者が積極的にこれらを「擦文文化」と考えるのは、これを一つの時代概念として考え方とするためでもあり、その後のアイヌ文化成立過程のうえでこうした遺跡を含む擦文文化の意味を積極的に評価していこうとする考え方に基くからである。
- 22) これは道東部貼付浮文期の変化と理解されるところであり、道北部沈線文期の内容はその前段階と大きな差をもつとは言えないであろう。
- 23) こうした資料が多数最初に報告された遺跡名をとって「上泊式」を使用したい(大場, 168)。佐藤氏(1972, 480)の用法に従うならば、その「上泊1」とされたものである。
- 24) こうした点は佐藤氏(1972), 大井氏(1972b)等が指摘されている。
- 25) 香深井遺跡の擦文文化堅穴住居址の位置付けについては別の考え方も成立するのではないかという意見を藤本氏(1982b)が提出されている。しかし筆者の編年観よりするならばそうした考え方には成立しないと思う。この点については報告者に近い立場である。
- 26) こうした考え方を初めとして、その他既述・後述の諸点について大井氏の諸論考には同意しえる点も多く、さらに触発される点も多々あることを特に記しておきたい。
- 27) 大沼遺跡においてカマド付きの方形住居址から上泊式土器が出土している点は興味深い。今後、資料の増加にともない、上泊式の細分、その文化的帰属についての議論も生じるかもしれないが、今日の段階では上泊式土器を道北におけるオホーツク式土器の終末型式と理解しておくこととする。
- 28) 佐藤氏によれば(1972, 480)北海道内においてさらに多くの地点から南貝塚式が出土しているようである。川尻北チャシ例を南貝塚式とすることについては、その文様要素・文様構成からして問題がなからう。広瀬遺跡例も所謂摩擦式浮文・型押文という点において問題はないと思う。
- 29) 大井氏がトビニタイⅡ式土器についての筆者の考え方を了解されなければこうした問題の設定は成立しない。
- 30) 道北・道東両地域における擦文文化とオホーツク文化との接触・交流には沈線文期・貼付浮文期をふくめて若干の差が存在したかもしれない。それは日本海岸部の擦文文化には宮塚氏の説くように(1983, 16)ある地域的特色が存在するように思われるからである。この点については日本海側の擦文文化の地域性を生ぜしめる要因等についての究明を待ちたいと思う。
- 31) 勿論、氏の論考において、その論の展開はこの逆である。論の結果として「奥州藤原征討」をその遠因として考え方とされているのである。
- 32) 擦文文化期の道南部については久保氏(1983, 35)の説かれるように生業形態のあり方をふくめて道央・道東北部と異なる点も多いかと思われる。今後の課題であろう。
- 33) これはあくまでも図示された擦文式土器(MacCord 1960, Pl. 8b)が堅穴に伴ったと考えた場合である。
- 34) 筆者は擦文式土器の終末をもって擦文文化の終末を考える以上、道央部と道東・道北部との間に数百年という時間差を考える必要はないと思う。ただし、後述するように佐藤編年Ⅳ期以後、両地域の間には一面において大きな文化的な差が生じていたことも事実であろう。
- 35) この「無調整」というのは図版等より判断して、杯外面にヘラケズリ等の調整痕がみられないというこ

とのようである。

- 36) 杯のみを使用してのクロス・データリングについては多くの人々の批判のある通りである。例えば佐久間氏(1978)の論文を見られたい。本論においては「仮説」設定のための一手段にすぎないものとして考えていただきたい。ただし佐久間氏によれば、横山氏等(1975)が「北海道式土師器」とされたものは、氏の猫谷地遺跡第Ⅰ様式に近く、その実年代を8世紀末~9世紀初頭に考えられている。そして第Ⅲ様式を900年前後に考えられているわけであり、筆者の上記実年代との間に大きな差異はないようと思われる。一方、末広遺跡の報告書中、大谷氏(1982, 467)は当遺跡存続期間を8~11世紀とされており、その点においても問題はなかろう。
- 37) 同一住居址から出土したものを、一方では土師器編年との関係で考え、一方は擦文式土器と考えることについては問題があると考える人がいるかと想像する。しかし、これについては土師器と擦文式土器両者の「あり方」の問題として今後考究すべきであろう。一方、土師器と擦文式土器との区分については種々の議論があるが、擦文文化を「国分併行の地方的土師器文化」(吉崎, 1982, 49)と考える立場は、「アイヌ文化史」といったものを否定することとなろう。
- 38) 末広遺跡報告書中には苦小牧火山灰(Tm)についての新井氏(1982)の報告がある。それによればTmは十和田火山灰(To-a)の20~30年後に降下したものという。さらに町田・新井氏等(1981)によれば、白鳥氏(1980)が表杉ノ入式E群の実年代を考える際に利用した宮城県多賀城の「灰白色土」はTo-aであるという。白鳥氏はこの「灰白色土」を10世紀前半とされているわけであるが、町田氏等がこの層をTo-aと同定する点については井上氏他(1982, 469~485)の指摘もあり、今日の段階で町田氏等の説を安易に利用することは残念ながらめらわれる。
- 39) 近年においては宇田川氏(1977), 菊池氏(1979)の集成がある。東北地方北部における平安中・後期以後の鉄器生産の問題、道央における小鍛冶の問題等々、今後追求すべき点であろう。
- 40) 壁穴住居の廃絶と鉄器普及との関連については渡辺仁先生より教示をえた。両者の関連について近日中に『北方文化研究』に発表されるとのことである。

引用文献(アイウエオ順)

- 相原康二, 1981, 「岩手県南部における古代の土器編年試案」他(参考資料1~3), 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』No. 12 所収。
- 天野哲也, 1975, 「オホーツク文化における動物儀礼の問題」, 『北大史学』No. 15.
- 同 上, 1979, 「オホーツク文化の展開と地域差」, 『北方文化研究』No. 12.
- 新井房夫, 1982, 「千歳市末広遺跡におけるごく明粒白色火山灰」, 大谷他(1982)所収。
- 石附喜三男, 1968, 「擦文式土器の初現的形態に関する研究」, 『札幌大学紀要』。
- 同 上, 1969, 「擦文式土器とオホーツク式土器の融合・接触関係」, 『北海道考古学』, No. 11.
- 石附喜三男他, 1973, 『伊茶仁遺跡』
- 井上克弘他, 1982, 「東北地方における奈良~平安時代遺跡埋土中の粉状バミスについて」, 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』, No. 13 所収。
- 上野修一他, 1979, 『札幌市文化財調査報告書』, No. 20.
- 同 上, 1980, 『札幌市文化財調査報告書』, No. 22.
- 宇田川洋他, 1971 a, 『弟子屈町下鑓別遺跡発掘報告』
- 同 上, 1971 b, 『羅臼』
- 宇田川洋, 1975, 『幾田』
- 同 上, 1977, 『北海道の考古学』, No. 2.
- 同 上, 1980, 「擦文文化」, 『北海道考古学講座』所収。
- 大井晴男, 1970, 「擦文文化とオホーツク文化の関係について」, 『北方文化研究』, No. 4.

オホーツク文化の終焉と擦文文化

- 同 上, 1972 a, 「北海道東部における古式の擦文式土器について」, 東京大学 (1972) 所収。
- 同 上, 1972 b, 「礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について」, 『北方文化研究』, No. 6.
- 同 上, 1973, 「オホーツク式土器について」, 大場他 (1973) 所収。
- 同 上, 1982, 「土器群の型式論的変遷について」, 『考古学雑誌』, Vol. 67, No. 3, 4.
- 大谷敏三他, 1981, 1982, 『末広遺跡における考古学的調査』
- 大場利夫他, 1960, 『女満別遺跡』
- 大場利夫, 1962, 「モヨロ貝塚出土の金属器」, 『北方文化研究報告』, No. 17.
- 同 上, 1968, 「北海道周辺地域に見られるオホーツク文化(Ⅱ)」, 『北方文化研究』, No. 3.
- 大場利夫他, 1972, 『稚内・宗谷の遺跡・続』
- 同 上, 1973, 『オンコロマナイ貝塚』
- 同 上, 1976, 『香深井遺跡』, No. 1.
- 大沼忠春, 1979, 「北海道中央部の擦文文化」, 『どるめん』, No. 22.
- 岡田淳子他, 1978, 『亦稚貝塚』
- 加藤晋平他, 1978, 『天塩川口遺跡』
- 同 上, 1981, 『広瀬遺跡』
- 金盛典夫, 1976, 『ピラガ丘遺跡—第Ⅲ地点発掘調査報告一』
- 同 上, 1981, 『斜里町文化財調査報告』, No. 1
- 菊池徹夫, 1970, 「擦文式土器の形態分類と編年についての一試論」, 『物質文化』, No. 15.
- 同 上, 1972, 「トビニタイ土器群について」, 東京大学 (1972) 所収。
- 同 上, 1979, 「擦文文化の鉄器について」, 『どるめん』, No. 22.
- 菊池俊彦, 1976, 「オホーツク文化にみられる靺鞨・女真系遺物」, 『北方文化研究』, No. 10.
- 北林八州晴他, 1979, 『碇ヶ関村古館遺跡発掘調査報告書』
- 久保泰, 1983, 「静浦遺跡と道南地方の擦文文化」, 『考古学ジャーナル』, No. 213.
- 河野広道, 1955, 「先史時代史」, 『斜里町史』所収。
- 児玉作左衛門他, 1956, 「根室国温根沼遺跡の発掘について」, 『北方文化研究報告』, No. 11.
- 駒井和愛編, 1964, 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』(下)
- 佐久間豊, 1978, 「奈良平安期土器の型式分析」, 『考古学研究』, Vol. 25, No. 4.
- 桜井清彦, 1958, 「東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題」, 『館址』所収。
- 佐藤達夫, 1972, 「擦文土器の変遷について」, 東京大学 (1972) 所収。
- 佐原真他, 1978, 『標津の竪穴』
- Shubin, V. O., 1979, *Arkheologia Amuro-Sakhalinskogo Regiona*.
- 白鳥良一, 1980, 「多賀城出土土器の変遷」, 『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』, No. 7.
- 帽田光明, 1980, 『標津の竪穴』, No. 3.
- 同 上, 1982, 『伊茶仁カリカリウス遺跡発掘報告書』
- 高杉博章, 1982, 「擦文文化の終焉」, 『史学』, Vol. 52, No. 2.
- 高橋作右エ門他, 1982, 『水沢市膳性遺跡』
- 東京大学, 1972, 『常呂』
- 豊原熙司他, 1980, 『船見町高台遺跡』
- 野村崇他, 1982, 『二ツ岩』
- 羽賀憲二, 1975, 「札幌市琴似川流域にあった竪穴住居址群—明治中頃に作られた竪穴分布図について」, 『北海道考古学』, No. 11.
- Higgs, E. S. 他, 1975, *Paleoeconomy*.
- 藤本 強, 1965, 「オホーツク土器について」, 『考古学雑誌』, Vol. 51, No. 4.

- 同上, 1972, 「常呂川下流域の擦文土器について」, 東京大学(1972)所収。
- 藤本強他, 1977, 『岐阜第二遺跡』
- 藤本強, 1979, 「トビニタイ文化の遺跡立地」, 『北海道考古学』, No. 15.
- 同上, 1982a, 『擦文化』
- 同上, 1982b, 「書評: 大場利夫・大井晴男編『香深井遺跡』上・下」, 『考古学雑誌』, Vol. 68, No. 2.
- 本田克代他, 1970, 「羅臼町出土のオホーツク式土器について」, 『北海道考古学』, No. 4.
- MacCord, H. A., 1960, "Cultural Sequences in Hokkaido, Japan", *Proceedings of the United States National Museum*, Vol. 112.
- 町田洋他, 1981, 「日本海を渡ってきたテフラ」, 『科学』, Vol. 51, No. 9.
- 前田潮, 1976, 「北海道の内耳鍋について」, 『古代・中世の社会と民俗文化』所収。
- 三浦圭介, 1982, 「青森県における奈良・平安時代土器編年一覧」, 青森県考古学会発表要旨。
- 宮城県多賀城跡調査研究所, 1981, 『多生館遺跡 I』
- 宮塚義人, 1983, 「小平町高砂遺跡の調査」, 『考古学ジャーナル』, No. 213.
- 山浦清, 1977, 『南西アラスカ・アリューシャン列島における回転式鉛頭の型式学的研究』
- 同上, 1982, 「オホーツク文化の骨斧・骨鎗・骨鍬」, 『東京大学考古学研究室研究紀要』, No. 1.
- 横山英介他, 1975, 「北海道の土師器」, 『考古学研究』, Vol. 22, No. 2.
- 吉崎昌一, 1982, 「擦文時代の開始にからむ諸問題・討論」, 『考古学研究』, Vol. 28, No. 4.
- 吉野勢津子, 1974, 「十勝地方におけるオホーツク」, 『浦幌町郷土博物館報告』, No. 5.
- 米村哲英, 1970, 『ピラガ丘遺跡』
- 渡辺仁, 1974, 「アイヌ文化の源流—特にオホーツク文化との関係について—」, 『考古学雑誌』, Vol. 60, No. 1.

The Last Stage of the Okhotsk Culture and the Satsumon Culture

Kiyoshi YAMAURA

The Okhotsk Culture coexisted with the Satsumon Culture, though the former had their territories along the Okhotsk sea coast of Hokkaido and the latter distributed in the inland. The Satsumon people could get more iron tools as articles of trade than the Okhotsk people could. Finally the Satsumon Culture dominated the Okhotsk Culture. Consequently some elements of the Ainu Culture, the successor of the Satumon Culture, originates in the Okhotsk culture.